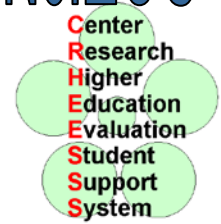


週刊センターニュース No.293



第293号(2010年1月18日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

○●○ 第254回共同学習会のご案内 ○●○

日時: 1月22日(金) 16時30分-18時00分 ※開催曜日が通常と異なりますのでご注意ください。

会場: 角間キャンパス総合教育1号館2階会議室

テーマ: 「未来への好奇心の種をまく!サイエンスコミュニケーション」

企画者: 末本 哲雄 (FD・ICT教育推進室)

講師: 矢野 真理子 氏、 武谷 真由美 氏

概要: 近年、日本各地で科学技術コミュニケーションが盛り上がりを見せている。科学技術コミュニケーションとは、単に科学ネタを分かりやすく伝えるだけではなく、複雑な社会問題を専門家と市民の共同から解決していく手段でもある。そのために両者の間における双方向の対話が欠かせない。市民の科学に対する関心が薄れていると指摘される状況で、専門家と市民を結びつける科学技術コミュニケーションに期待が寄せられている。

今回の共同学習会では、国立科学博物館サイエンスコミュニケーター養成講座修了生2名に講演をいただく。彼女らの実践活動や教育プログラムの紹介を通して、本学の科学コミュニケーションについて議論を深めたい。

○●○ 大学コンソーシアム石川主催 第4回FDセミナーの報告 ○●○

先週15日に大学コンソーシアム石川シティカレッジ教室1にて、大学コンソーシアム石川主催(本センタ共催) 第4回FDセミナー「大学教育におけるeラーニングによる単位認定」が開催された。講師として、青山学院大学 ヒューマンイノベーション研究センター 齋藤裕先生をお招きし、青山学院大学での状況や他の大学の状況などご講演頂いた。はじめにeラーニングによる授業の単位を認定することに関わる大学設置基準第二十五条第二項に基づいた「大学が履修させることができる授業について定める件(平成十三年文部科学省告示第五十一号)」について説明がされた。この告示で示される様々な通信媒体で、同時且つ双方向性が担保されること、設問解答、添削指導、質疑応答などができ、学生等の意見交換ができる機会が確保されているといった条件の下、青山学院大学はeラーニング専門家の育成と配置により管理運用を行ってきたことについて説明された。

その前提として、eラーニング導入のメリットを考慮するべき点について説明がなされた。eラーニングの大きなメリットとしては学習ログを見ることで学習者の学習行動がほとんどわかるということもご指摘されたが、「いつでもどこでも学習する機会」を与えることができると言われるメリットは大きな誤解であって、「対面授業(研修)より学習機会が多い」ということが拡張されて解釈されているということ、コスト削減というメリットも初期投資は金銭的、時間的、人力的にも非常にかかるもので、5年といった長期の運用によってメリットがもたらされるということも説明された。

eラーニングは受講者に対して、自分で学習計画を立て、実行し、内省をし、学習を継続させていくという自己調整学習を行うことが求められる。残念ながらeラーニングによる学習者は様々な理由によりドロップアウトすることが多い。そのためeラーニングを設計・開発し、運用するに当たっては、学習者は自己調整学習が弱いことを前提にすることが要点としてご指摘された。青山学院大学ではそのために、学習支援者(eメンタ)の育成と配置を行い、学習支援を行っている。そのほか、青山学院大学ではeラーニング専門家として、インストラクター、授業設計者であるインストラクショナルデザイナー、学習管理システムなど情報技術の設計・開発・管理運用を行うラーニングシステムプロデューサー(LSP)、学習教材を実際に開発するコンテンツスペシャリストの育成を行っている。これらの研修は外部からも参加可能であり、eラーニング人材育成研究センター(eLPCO)で定期的に行われている。

最後に対面授業とeラーニングのブレンド型での実践と対面講義とeラーニングの講義の効果比較について説明があった。特に後者は情報科目の大人数講義で、希望制で完全オンライン型eラーニングを受講するか、対面講義を受講するか学生に選択してもらい、1 Semesterで効果の比較を行った実践であった。その結果、授業満足度、自己効力感、成績等でeラーニングの方が高いことが示されたとしている。

本学でもeラーニングの導入は始まっており、システムに対する金銭的コストはかからない。しかし、単位認定をするためのeラーニングコースを提供する場合は、1人の教員だけで実施するには負荷が大変高く、何人かのチームで実施する体制を作る必要があるだろう。また学習ログを見て、受講者の行動をモニタリングしておくなど、手間は大きい。また学習内容として、必ず正しい答えがあるものの方がeラーニングの設計がしやすく、効果測定もしやすい。また大人数が受講する講義で行う方が、システムで扱うメリットが大きいことも注目すべき点であろう。長期的に見て、大変有効な学習形態であるため、実施にご興味がおありになる先生方はぜひ検討して頂きたい。

青山学院大学 eラーニング人材育成研究センター

<http://elpco.a2en.aoyama.ac.jp/>

青山学院大学 ヒューマンイノベーション研究センター

<http://www.hirc.aoyama.ac.jp/>

(文責：教育支援システム研究部門 山田政寛)

○●○ 第7回大学教育セミナー開催のご案内 ○●○

近年、大学教育において、授業を教員から学生への単なる「知識の伝達」の場ではなく、教員－学生の双方向性、または学生間のコミュニケーションを通じて学ぶ、「知識の構成・再構成」の場として捉える考え方が強くなってきています。その状況下において、グループワークを中心とした問題解決学習、探求学習やプロジェクト学習など、アクティブラーニングと総称される、学習者の能動性を引き出す授業形態も導入されています。しかし、アクティブラーニングにおいて、教員は知識の伝達者だけではなく、学生の積極的な学習を支援する、いわばファシリテーターという役割を担うことになり、具体的なアクティブラーニング実施法について不明な点も多くあります。またアクティブラーニングは教員が主導する授業形態ではないことが多く、その授業形態を演出し支援する学習空間についても検討が必要となります。

そこで、本セミナーではまず日本で数多くの様々な教育実践、教育研究を取り組んでおられる白鷗大学教授 赤堀侃司先生より、アクティブラーニング実施の上で最も重要なことである学習者の能動性を引き出すために教員が考えるべきことについてご講演頂きます。また、アクティブラーニングの実践・研究をされている先生方をお招きし、アクティブラーニングの理論や実践、今後の展開についてご講演頂き参加者の皆様と大学教育のこれからについて活発な議論をしていきたいと考えています。

主催：大学教育開発・支援センター 共催：大学コンソーシアム石川 後援：日本教育工学会

テーマ：「アクティブラーニングが創る大学教育の未来」

日時：2010年2月22日(月) 12:30 受付開始 13:00 開始

会場：金沢大学サテライトプラザ(金沢市西町三番丁16番地 金沢市西町教育研修館)

プログラム

13:10-13:30 趣旨説明 山田政寛(金沢大学 大学教育開発・支援センター 准教授)

13:30-14:30 基調講演 主体的な授業を求めて－私の実践から－

赤堀侃司(白鷗大学 教育学部 教授/東京工業大学名誉教授)

14:45-15:30 講演 知識・技能・態度の全体的育成を目指すアクティブ・ラーニング

－授業デザイン評価の関連に焦点づけて－

溝上慎一(京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授)

15:30-16:15 講演 学習空間とアクティブラーニング－東京大学 KALS の実践をもとに－

西森年寿(東京大学 教養学部附属教養教育開発機構 特任准教授)

16:30-17:20 パネルディスカッション 司会 山田政寛 パネラー：赤堀侃司、溝上慎一、西森年寿

※参加申込：件名を「2月22日大学教育セミナー参加希望」として、所属・職名・名前・情報交換会参加可否を明記の上、2月17日(水)までに電子メールにて山田まで(mark@mark-lab.net)。